

■呉春(松村月溪)
ごしゅん
.....1752=

絵師。与謝蕪村の弟子を全う後、円山応挙の畏友となり、新しい風を起こして、四条派の始祖になった。

京都京都堺町通四条下ルで、金座年寄役松村家の六人兄弟の長男に生まれる。名は豊昌、通称は文蔵。

大岡忠光没・1760= 8歳：
.....1761= 9歳：

非常に手先が器用で、大判小判を数える時には、右手から左手へ金貨を投げ上げ、その一瞬の間に贖金を傍らに選り分けたという逸話が残る。社交を好む粋な都会人で、絵の他にも俳諧、書、篆刻、謡曲、横笛、蹴鞠にも堪能だった。

.....1769=17歳：家業を継いで金座平役になる。金座は平役でも月收入がおよそ百両あり、家は裕福だった。

.....1770=18歳：母が死去。この頃、旦那芸として、大西酔月の門を叩き、絵を学び始め、

御蔭参流行・1771=19歳：酔月が亡くなると、与謝蕪村に入門、俳諧を学ぶうち、南画(文人画)に才能を発揮、

田沼意次老中・1772=20歳：

大原騷動・1773=21歳：俳書に「月溪」の名が初めて見えるが、俳号月溪の名は終生用い続け、俳画や俳諧でも月溪を名乗る。

解体新書・1774=22歳：蕪村が乙総に宛てた書簡に入れた「老いなりし」句画賛で、自らの句に絵をつけて指導しており、

黄表紙始・1775=23歳：*早くも「平安人物志」の画家の項に、月溪の名前が載ると、絵師として身を立てようと、金座を辞し、

雨月物語刊・1776=24歳：この年の作品「拾得図」に、やはり「平安人物志」に名の載る書家日高撲堂の詩賛、

ワッ船蝦夷来 1778=26歳：金座に勤めていた時、身請けしていた嶋原の名妓太夫雛路(本名はる)と結婚。「騎馬狩猿図」には当時の大坂を代表する江村北海の詩賛があるように、京の文化人との交流が見られ、

源内獄中死・1779=27歳：異母末弟の松村景文が誕生。鴨川近くに居室(百昌堂)を持ち、初期の代表作「田舎清閑図」、「寒山拾得図」、蕪村の傑作「鶯・鴉図」を翻案した「猿・鹿図」などを経て、「瀧山落帽子・宴桃李園図屏風」に至る。

.....1781=29歳：妻が単身里帰りの途中海難事故に遭って死去、続いて父匠程が江戸で客死、「朱買臣図」に心境を描き、蕪村の勧めで、蕪村門下の俳人で、パトロンであった呉服商川田田福を頼り、池田に移住して寄宿。

天明大飢饉始1782=30歳：この地の古名である「呉服(くれは)の里」で新春を迎えたことを喜び、姓を呉、名を春と改め、剃髪。

蘭学階梯・1783=31歳：蕪村が弟子の松岡土川に送った手紙では、呉春のことを「篤実な君子」、絵と俳諧は勿論、横笛なども上手い「器用なるおのこ」で、特に「画は愚老も恐るるばかりの若者」だと記している。蕪村が重病に伏せると、京に戻って、兄弟子紀樸亭と共に献身的に看病、その臨終に立ち会う。師の死後も、自ら挿図を描いて遺作句集「新花摘」を出版し、蕪村の遺族の世話をする。

意知刺殺事件1784=32歳：'食い物が解らない者は、何も上手になれぬ'と、池田で、美食の集まり(一菜会)を始める。_無村の旧稿に挿絵を入れて「新花摘」を上梓。

田沼意次失脚1786=34歳：翌年にかけて10回、蕪村の{屏風講}に倣ってか、池田の酒造家を中心となって、講の参加者が1両ずつ出しあって代金を募り、くじ引きで呉春の絵を得る仕組みの{掛物講}が催される。この頃から次第に師匠とは対照的な画風である円山応挙に接近していくことから、この年までを「池田時代」「天明時代」というが、「酔柱馬上図 竹山詩賛」「莊子支離人物図」など、のびのびとした描きっぷりの作品が多い。この頃の作品と言われている「三十六歌仙偃息図巻」は、野々口立圃の「休息歌仙」に基づきながら、歌仙の腕相撲やにらめっこや、蕪村や其角など俳人の句も付け加えた独創的なもので、人氣を博して多くの模本類が作られた。その他、「柳鶯群禽図」「山水図屏風」「山樵漁夫図屏風」などが、この間の代表作。

寛政改革始・1787=35歳：おそらく応挙の紹介で、妙法院門跡真仁法親王から席画を請われ、妙法院へ出入りして、法親王側近の絵師となる。応挙を棟梁とする6人の絵師で、但馬国大乗寺に入った際、蕪村の「峨嵋露頂図」に倣った襖絵「群山露頂図」を制作、関係文書にも蕪村高弟月溪と記すなど、なお蕪村を慕う心情が窺える。

.....1788=36歳：天明の大火で焼きだされ、避難所だった五条喜雲院で、偶然にも応挙出合い、応挙から、「御所や門跡寺院に出入したいなら、漢画を捨てて狩野派や写生画を描かねば駄目だ」と助言され、文人画の味わいを残しつつ写実的な作風へと転進していく。この時、応挙に弟子入りしようとしたが、蕪村と交流があり呉春の画才を認めていた応挙は、莫逆の友として遇し、「ただ共に学び、共に励むのみ」と答えたという逸話が残る。

初の横綱・1789=37歳：{掛物講}最終回の作品「雨中輕舟図」を池田に送る。*池田を引き払って、京都の四条富小路に転居、門人をとるようになるとともに、新たな画風に進んだことを示す傑作「白梅図屏風」(重要文化財)を描く。

松平定信引退1793=41歳：東洞院錦小路へ転居。法親王の出遊先に円山応挙とともに召されて席画するなど、この前後、妙法院へ出入り、院の依頼で作画し、褒美度々、この間のもと考えられる「十二か月行事句図巻」で、蕪村以来取り組んできた俳画を集大成し、絵画の修練について、ある人物に宛てた手紙に、「優れた古画の模写と実物を見て描く写生を基礎に据える」よう推奨している。

写楽・.....1795=43歳：版本挿絵をいくつも手がける。_大乗寺の第二回襖絵制作に参加、その「四季耕作図」は明確に円山派風の作風へと変化するが、応挙及び円山派の写生画が、時に生真面目すぎて窮屈な感じを与えるのに対し、呉春の写生画には、もともとの気質が反映されて、平明で都会的な洒脱なものとなっていて、当時の人々に一層親しく感じられ、応挙が死去すると、京都画壇の中心となり、その画派は四条派と呼ばれるようになる。頼山陽は「京都の画風は、応挙において一変し、呉春において再変した」と評している。この間の代表作としては、「涅槃図」「泊舟図襖」「竹園屏風」「桃源郷図」「蔬菜図巻」などが挙げられる。

プロット来航・1796=44歳：東山新書画展観に「墨梅」を出品。妙法院襖に、岸駒と「山水図」を描くなど、合作も多い。

昌平饗始・1797=45歳：東山新書画展観に淡彩「三十六歌仙図」を出品。_妙法院への出入りが続くなか、西本願寺や禁裏御所の障壁画を度々手がけ、光格天皇の下令により揮毫した「桜花遊鯉図」など、社会的地位はますます向上するが、

膝栗毛始・1802=50歳：「亡母三十三回忌 菩提樹絵散華掛」を描いた頃には心身とも変わってきたようで、

青洲麻酔手術1805=53歳：_制作年の記された最後の作品「鬼外福内」はユーモア溢れるものの、長く仕えてきた真仁法親王が死去、

レバノ報復・1806=54歳：妙法院に真仁法親王の肖像画を調進。

ワッ船狼藉・1807=55歳：_12年前に死去した応挙を追薦する展観に「菩提樹図」を出品し、

フェイト号事件 1808=56歳：「蕪村七部集」序文を書き、この間の作品「荻風図」に和歌を賛した友人の上田秋成は、この頃の「胆大小心録」に、「呉春は病気で衰弱しており、高い謝礼で依頼されても描かない気難しさも見せていたと書いているが、気の向いたときは別人だったらしく、酔った勢いで、門人の柴田義重に「酒瓶の図」を与えている。

浮世風呂・1809=57歳：禁裏御所、花御殿の障壁画も制作していたが、_その秋成が死去し、

.....1810=58歳：_10年前に死去した応挙の高弟長沢芦雪を追薦する展観に「荷花図」を出品後、後妻うめも死去すると、

ゴロブニ拿捕 1811=59歳：_後を追うように、自宅で、没した。洛南大通寺に葬られ、弟子筆頭の岡本豊彦やの松村景文ら一門が碑を建立し、「呉春肖像」を描いた門人紀広成は、その上部に師を称える文を記している。大通寺が荒蕪したため明治22年、四条派の絵師たちによって松村景文と共に、金福寺の蕪村の墓隣に改葬された。宝塚歌劇や東宝の創業者として知られる小林一三(逸翁)は、池田に住っていたことから、蕪村や呉春の作品を多く所蔵、阪急文化財団の運営する逸翁美術館が保管・展示している。